

kinbaku
hatsue ogawauchi

緊縛

小川内初枝

緊

縛

小川内初枝

緊縛

二〇〇二年十月二十五日 初版第一刷発行

著者

小川内初枝

発行者

菊池明郎

発行所

筑摩書房

東京都台東区蔵前二五三 一―一―八七五五
振替〇〇二六〇八四二二三

印刷

株式会社精興社

製本

株式会社積信堂

小川内初枝（おがわうち・はつえ）
一九六六年、大阪府生まれ。大阪
府立大阪女子大学学芸学部国文学
科卒業。広告・出版会社をはじめ
として数度勤め先を変えながら小
説を執筆。二〇〇二年、「緊縛」
で第十八回太宰治賞受賞。

ISBN4-480-80368-8 C0093 Printed in Japan
© HATSUE OGAWAUCHI

乱丁・落丁本の場合は、左記宛に御送付下さい。

送料小社負担でお取り替えます。

ご注文・お問い合わせも左記へお願いします。

〒三三二―八五〇七 さいたま市櫛引町二六〇四

筑摩書房サービスセンター

電話〇四八―六五一〇〇五三

緊縛

装丁 櫻井 浩 (© Design)
カバー写真 久家 靖 秀

栗だった肌を、男の手が無造作につかんだ。たるんだ薄い皮膚が、男の指の下でぐにやりとつぶれる。

「首は落としてるけど、首の皮が出てるとなんだから、胴の中に押し込んで……」

男の手が肌の上をもぞもぞと動く。隣の若い女が、気の抜けた微笑みをその手に注ぐ。

「次に、こうやって……」

男は女に語りかけながら、腹の真中にはつくりと口を開けた裂け目に、やおら指を突っ込んだ。内臓はあらかじめきれいに切り除かれているらしい。男は両手の指で、裂け目を心もち押しひろげた。淋しい穴が広がる。

「中をきれいに拭くんだよ」

男は神妙な面持ちで穴をまさぐった。女は、はい、と頷いたまま、ただぼんやりと立ちつくしている。男は、微かに水気の染みたキッチンタオルを穴からそろそろと取り出した。

「じゃあ、次は、しっかり縛るんだ」

男は、ももを胸にびったりと添わせ、手羽を背中で組ませて全体を小さくまとめ、たこ糸で縛り始めた。

（あ、私や……）

私は思わず呟いた。さっきまでの私だ。

なんで七面鳥料理じゃなくて、ローストチキンなんだろう、不景気のせいだろうか、確かに鶏肉の一羽買いは割安なわけだし、などという散漫さんまんとした思考は消し飛んで、

私はテレビの画面に見入った。

鶏肉がたこ糸で縛られる様子がもの珍しいのではなく、今、こうして私がそれを見ていることに、妙な感慨を覚えた。

ももの先の細い部分に糸がくいこむ。あわいピンク色にてらてらと光る肌がよれて、みじめな細かい皺が無数に現れる。

「なんだか、痛そう……」

相変わらずぼんやりと立ったままのアシスタント役の女が小さく呟いたのを、マイクが拾った。

（そんなわけないやん。痛いとか、そんなとちやうねん）

私は、料理番組に似つかわしくない、そしていかにも若い女の言いそうなそのコメントにむっとして、胸の内で毒づいた。

「ね、こうして、ちゃんとお行儀よくさせるんだ」

料理のプロではなく、タレントが本業である男は、料理が得意であるといっても、やはりきちんと縛れたことにほっとしたのか、晴れ晴れとした笑顔をこちらに向けて、

手元の鶏の肌を撫でた。

そう、さっきまでの私。

たまらなくなつて、

「ねえ、利明。ねえってば」

と声をあげた。鼻にかけた甘え声。だが、いくら体を揺すつても、利明はベッドの上で小さくうなるだけで、壁を揺んだ姿勢のまま、目を覚ます気配はない。

「ほら。ねえ、見てよ」

重たげに体を揺らしながら利明が寝返りを打ってこちらに向いた。私は一層激しく腰をつかんで揺する。

「なに？」

薄目を開けた利明に私は、ほら、ほら、と勢いづいてテレビの画面を指さした。

「ほら、ね、私」

「ああ」

と力なくテレビに目を向け、すぐにかぐりと瞼まぶたを閉ざし、利明はまた深い眠りに落

ちたようだ。

(ねえ、もう一回しよう。してよ)

取り残された私は、その言葉を呑み込んだ。

鶏は塩とこしょうを体じゅうにすり込まれ、玉葱、にんじん、ローリエにふち取られて、オーブンの中へと消えてゆく。

さっきまでの私は消えた。からだの中に深い穴のようなため息が拡がる。

ベッドサイドのほのかな明かりは、利明のきれいに揃ったまつ毛と、眉間からまっすぐに伸びる高い鼻梁に濃い影をつくり、テレビから放射する明かりは、画面のふちにうつすらと積もる埃を^{ほこり}浮き上がらせていた。テレビばかりでなく、淡いクリーム色に統一された部屋は全体に埃っぽく、味気ない表情を見せている。

去年もそうだった。

去年は、わりに名前の知れたホテルのはずなのに、と驚いたものだったが、今年は、また同じホテルだと聞かされた時から、あの埃部屋かと懐かしんだりしたくらいだから、この佻^{わひ}しさ^さが、案外嫌いではないのかもしれない。

小さな窓のカーテンをひくと、そこから見える景色は、アングルといい、闇に浮かぶ明かりの具合といい、去年のままのような気がした。もしかしたら、去年と全く同じ部屋なのかもしれない。

テレビから歓声^があがる。見ると、こんがりと焼き上がった鶏^が、画面に大きく映っている。もう、生々しさもグロテスクさも消え、ただ、愛嬌^{たつぷり}の、ローストチキンと成り果てている。

（もう、遅い）

今さら利明を起こしたところで仕方がない。糸は解かれつつあった。さっきまでの私は跡形もなく消え、いや、消える以前に存在すらしなかったのかもしれないが、その証拠に余韻^{のか}けからもなく、利明は眠り呆^{ぼろ}けている。ここ一、二年の間に肉付きのよくなった腹やふともを、備え付けの浴衣からあらわにして死体のように眠っている。空調^がきつすぎるのかもしれないと思って、後ろの壁のエアコンの下向きの矢印がついたボタンを何度か押してみたが、乾いた音がするばかりで、室温が変わる気配はない。ベッドの隅に丸まった、薄いアクリル毛布と白いシーツを利明の上に掛けて

みたが、利明の足は、それをすぐに跳ね上げる。

テーブル上のミネラルウォーターを、ペットボトルのまま喉に流すと、いくらでも飲めた。水の重みで体がふらふらと下に傾いて、テレビの前の小さな椅子に慌てて尻をつく。尻をついても、生温くなった水を飲み続けていると、これが、いずれ汗やおしっこや涙になって私の中から出ていくんだと思う。そんな無用の循環のために、たとえ喉が乾いていない時でも、水は常に飲まなければならない。

クレソンに飾られたチキンは、皿の上で、ももと手羽と胴にさばかれ、その胴は、また切り刻まれた。陰りのない男も、若い女も、チキンをおいしいと言う。かけらは、次々と口中に消えてゆく。料理番組の最後の試食でこんなに食べるものかと、水を飲みながら私は思う。だけど、チキンは消えてゆく。

「明日のクリスマス・イブに、ぜひ、お試し下さい」

という男の一言で、画面はコマーシャルに切り替わった。

テレビを消すと、利明の規則正しい寝息と、私の喉が鳴る音が、部屋の中に大きく響く。五百ミリリットル入り一本を飲み干し、私は二本目を手にしていた。ぽたぽた

と口もとからしずくがしたたり落ち、濡れたナイロンのスリッパがふともみに張り付く感じが、心地いい。ベッドサイドの電気スタンドの明かり一つになった部屋は、利明の寝顔がぼうつと浮かび上がるだけの、薄い闇に包まれる。

ボトルを埃だらけのテーブルの上に置き、シガレットケースに手を伸ばす。ライターのかちりという音で、利明はうん、とうなりながら目を覚ました。なんで、と私は思う。

「美緒、なんだ、まだ起きてたの」

寝起きの利明の瞳は、なぜか二重の瞼の奥に深い陰がさして、それが妙にきれいだった。このごろ、その瞼にも無用な肉がつき始めてはいたが、それでも相変わらず私は見とれた。

「うん、なんだか眠れない」

「もう一回したい？」

えっ、とわざと声をあげる私に、利明は、うそぞ、と言いながら背を向け、壁に向かって体を丸めた。

「美緒も早く寝ないと。明日は朝、早いんだし」

うん、と呟きながら、利明の背に向かって煙草の煙を吐き出した。もう寝息をたてている、その背がむしように腹立たしく、淋しい。

「ねえ、ねえ」

煙草を灰皿に押しつけ、利明の体にまわり付いた私を身をよじって避けながら、利明は小さくあくびをし、さっきしたろ、と壁に向かって寝言のように呟いた。

（それで、ええの？）

私は利明の背に問いかける。すう、すうという寝息が聞こえる。シーツを掛けると、利明の足がまたそれを跳ね上げた。

七年になる関係で、縛られたのは、さっきが初めてだった。ずっと縛られたいと思っていた。痛いのも、気味の悪いのも、恐いの嫌だったが、縛られることには、なぜか執着があった。それも、頑丈そうなロープなんかではなく、例えば、ネクタイとか、私のスカーフとか、そんなもので、さりげなく。

ベッドの利明の脇に滑り込むなり、利明が私を抱きしめるのは分かっていた。私は、

風呂あがりに、旅行かばんからひっぱりだしたスリッパを着け、髪にドライヤーの熱風をあてた。煙草を吸い、ユニットバスの手洗いでうがいをし、おもむろにベッドに向かう。

いつも通り、利明は、私のスリッパとショーツを慌ただしく脱がして、自分もそくさと裸になり、若々しい男の子のような、唐突で力強く爽やかなセックスをするはずだった。挿入までを、少しでも長く、ゆつくりとたのしみたいという気分は利明にはない。私が利明の体を愛撫する隙すらも与えない。三十三歳から四十歳になった利明は、世間並みに衰えて前戯に凝るかと思いきや、この七年、変わることがない。二十五歳から三十二歳になった私は、日に日に前戯にこだわら、指や舌を使う利明の姿を夢想する。長く長く、舌や指先や腕全体や足で繋がっていたい。遅い挿入は、確かに気持ちいいものだけど、果ててしまえば、何事もなかったかのように利明の体は離れてしまうのだから。

私は利明の脇に滑り込んだ。寝息をたてていたはずの利明は、むくりと体を起こし、私の体の上にまたがるなり、私のスリッパとパンツを剥ぎ取った。私はされるがまま

に重石おもしのように横たわっている。手早く浴衣の帯を解き、裸になる利明を物憂ものうげに見つめる。利明が、私の目を見すえたまま、左半身だけを大きく傾け、ベッドの下、さつき脱ぎ捨てた浴衣の帯をつかみ上げた。

「縛らせて」

「えっ」

利明は私の返事も聞かず、私の両手を引つ張りあげて上体を起こし、体の向きを反転させて、私の両手首を背中で組ませていきなり縛り始めた。

枕を見つめながら胸がざわついた。利明の左手は、帯が落ちた場所を的確に把握していたらしい。探ることなく、目をやることもなく、見事につかみ上げたのだから。

とすれば、最初から縛る気だったのだろうか。その帯で縛る気で、帯が落ちた場所を、落とす時から、把握していたのだろうか。いつから？ 今日、東京駅で会った時から？ 私は、いつから、縛られる女として、利明の前にいたのだろうか。

あつという間のはずなのに、私の頭の中は、忙しく回っていた。

私は縛られて、どんなことをされるんだろう。利明は、どんなことをするのんだろう。

利明は、股を開き両膝についてベッドに立っている私の前にくるとまわり込んで、私の腰をつかんで持ち上げながら、股の間に自分の体を滑り込ませた。そうやって利明の腰を跨^{また}いだ途端、固いものが、もう私の陰部にあたっている。驚く間もなく、挿入された。

利明の腰の上で私の体が跳ね上がる。単に後ろ手に手首を縛られただけの私の上体が跳ねる。こんなはずじゃない、と思いながら、体が揺れる。利明は私を縛ったことなど忘れたかのように、ただ腰を突き上げる。いつもと要領が違うせいかな、ベッドについた膝に力を入れても、バランスをとりかねて、私の体は利明の上に倒れ込みそうになる。腹に力を入れて、それに耐える。

何度か倒れ込みそうになった時、利明は、腰を動かしながら、いともあっさりと帯の端を引っ張って、私の縛^{いまし}めは解かれた。ふわりと自由になった両手が思わず利明の腰をつかむ。

ふと淋しくなった。ずっとずっと、縛られることを夢想していたのは何故なのだろう。縛られただけじゃ、ちっとも気持ち良くはなかった。利明は、どうして縛ったり